第４３期 レイカディア大学地域文化学科「近江と文学」学習発表 感想

「近江と文学」担当　西本梛枝（2022･04･23 記）

皆 さま

３ヶ月、ありがとうございました。コロナ禍の中での講座でしたが、皆様の熱力に支えられて、無事に終えることができました。さらに最終日には、楽しい思い出 を作っていただき、それもありがとうございました。

地域を見直す切っ掛けの一つに文学作品を加えてみてください、とご提案をして みたのですが、皆様の発表をお聞きしていて、皆様の目線の多様さに、この提案、 ストライクゾーンに入ったかな、と、嬉しくなりました。

皆様のご発表への感想、ザッとですが、記させていただきます。皆様のおもいと 違うように受け取っているところもあるかもわかりませんが、西本が感じたことで す。お調べになられたことを、機会を見つけてご近所の方やお子さん、お孫さん、 ご友人たちにも語ってさしあげてください。

★　★　★　★　★

●宮尾登美子『序の舞』

舞台の一つになった坂本の町のこと、今の坂本と併せてのご紹介があり、坂本の 風景を鮮明に思い描けました。作品に登場する場所、現地に行ってお調べになって みて、長浜を今までとは少し違う目線で観られたのではないかと思います。昌徳寺 は、作品では周辺の描写が変えてありましたが、おっしゃっていた室町の昌徳寺で す。ここには栖鳳が描いた襖絵が残っていましたが、何年か前に長浜城博物館に預 けられて、今、その襖絵は長浜城博物館にあります。旅館若松も 20 数年前（私が取材に行った頃）まであり、うどん屋さんになっていましたが、今はありません。

●芝木好子『群青の湖』

この話は美しい近江が各所に散りばめられていて、近江という宝石箱をひっくり返したように感じたのを覚えております。それを地図に示してくださっていたので、作者の近江への思いと近江の風景が具体的に掴めたように思いました。小説を 読んでいて土地勘がないと、内容がよそごとに感じられたりすることがあるのです が、場所や、土地と土地の距離感を地図で具体的に確認しながら読むと内容が理解 し易いですし、登場人物の立場に立った考え方ができたりもして、世界がより広が るので、読書を楽しくする方法の一つだと思っています。

●永井路子『雲と風と』

この作品は随筆のような小説のような…、でも、作家は史料をたくさん引き出し てきて、ポイントを太字にして、精巧に構築された作品なので、通り一遍に読んで いると通り過ぎてしまう部分があったりするのですが、**さん、正確に読み込ま れているな、と思いました。史実として曖昧な部分への言及もあり、客観的な考察 をなされていると感じました。　最後に見せていただいたあの書は**さんの書ですか？　素敵な世界でした。“雲”と“風”と、そして“ヤマ”の絵。破れたの残念ですね。表装してどこかに飾れそうでしたのに。

●水上　勉『湖笛』

　最初の写真に拙著が写っていてびっくり、と同時に、“NOT　文学散歩　　BUT　文学風景”と添え書きしてくださっていたのにカンゲキ！　　ありがとうございます。文学作品は“散歩”ではなく“風景”をまず探ってください…と頑固に？　　思っているので、そこを受け取っていただけて嬉しかったです。『湖笛』の、いわば発端　でもある宝幢院…、ひっそりしていますが、秀吉の専横ぶりを視覚で実感できると　ころでもあります。ご覧になられたように周囲も寂しげですし…。海津の桜は訪れ　る人は多いですが、ここを訪れる人が少ないのが残念ですが……。

●芝木好子『群青の湖』

“季節によって表情が変わる、顔が違う…”と感じられていたびわ湖が、この話に　繋がって来るように思った、とお話しされた部分に共感しました。染色、織物、も　季節によって風合い、というか表情が変わりますが、一番変わるのは、その織物を　身につける着手で、表情が変わるような気がしています。近江八幡の旧家…、モデ　ル…ということではないでしょうが、八幡堀を復活させた川端五兵衛さん（昔、市　長されていた）の家を頭に置いて書かれたのだと思います。芝木好子さんは志村ふ　くみさんや川端家とも交流があったようです。

●徳永真一郎『燃ゆる甲賀』

　作品の内容、時代背景、経過、状況…、そしてご自分の感想…等々をＱ＆Ａの形　にされていたのは意表を突いた形でした。それにより、奥村さんがおっしゃりたい　ことのポイントが大変よくわかりました。さらに写真と史料。「三上騒動」の意義　というか、全体像を明確にしたレポートで、こういう形でお子たちに語ったら、子　たちもよく理解するだろうな、と思いました。“栗東が出てこない…”というのは、 色んな事情があろう、と思いますが、「一揆」は何やかや言っても反社会的と見ら　れていた…ことへの後ろめたさもあったからではないかと想像しています。

●『平家物語』

　わかり易い解説つきで、『木曽最期』の段を読んでいない方も、どんなことが書かれているか解ったと思います。『平家物語』は語りものであり、読むのと、語りを聞くのとではリズムが違うから印象が違う…という話をなさっていました。琵琶法師が琵琶をかき鳴らしながら語る平家物語の情景は、やっぱり迫力があり圧巻です。“語り”の文学の凄さをあらためて思います。だから、（琵琶法師でなくても）自分が“声に出して読む”だけでも印象が違うような気がします。湖岸を通る度に木曽殿たちのことが偲ばれる、とおっしゃっていました。いいなぁと思いました。

●司馬遼太郎『街道をゆく　近江歴史散歩』

　司馬さんの文章は行間にも思いが込められている…と感じるのですが、それを味わうのは車での移動ではなく、やっぱり自転車か徒歩だと思っているので、この度、**さんが“レンタサイクル”や“徒歩”で取材されたというのを聞いて、なんだ　か嬉しかったです。『街道をゆく』で私が最も印象に残っている箇所は、安土山に　登った司馬さんが「やられた、と思った」と記述されているところです。「ケケス」 の章でも環

境破壊に言及されていますが、それを実感するには徒歩とか自転車…。　要は風を受けて歩かないと、なかなか実感できない、と思っています。

●「謎の大王　継体天皇」

古代、私も好きで、人間関係がややこしいながら興味津々の世界です。継体天皇　は謎がいっぱいですが、近江と越前では素通りできないお方。　なかなか小説にはとりあげられないですが、黒岩重吾が『北風に起つ』という長編小説を書いていま　す。蘇我稲目との知恵比べ、力比べ…で、やがて天皇として自分の地位をゆるぎな　いものにしていく話です。力の裏付けは“水辺”が重要、と継体は考えていたと私　は思っているのですが、（黒岩重吾はそうは書いてなかった…ですが、でも）彼の　歴史観、それはそれとして、フィクションとして面白かったです。

●門井慶喜『屋根をかける人』

近江八幡は「近江商人の町」で古いしきたりを守り伝えておられる家も多いでし　ょうが、併せて新しいものをどんどん採り入れていく風潮もあるように感じていま　す。保守的な部分と進取の気風を併せ持っていらっしゃるのが“近江八幡の人”の　特徴かな、と（八幡だけでなく近江の人の特徴のようにも思います）。日米の戦争　のさなか、日本人になろうと決意した理由は何だったのか…。一番大きな理由は「近江八幡」という町の風がヴォーリズは気にいっていた、という気がします。町の人　は戦争中といえどもヴォーリズを受け入れていた、という気がします。

●花登　筐『ぼてじゃこ物語（上下）』

“昔は泥臭い、と思ったが、今、読んだらわかった”という最初のお言葉に共感を　覚えました。「時」の移りは善かれ悪しかれ人も変えますものね。本への感想も違　ってくると思います。作品の描写を参考に自分なりの設定をしてみた…という話も　興味深く拝聴しました。時代を考え、舞台を考え、そこから話を広げていく、とい　うのは読書の一つの方法かもしれません。因みに…唐橋の色…「黄土色」ではなく
「唐茶色（からちゃいろ）」と言って下さ～い。（実は橋の色を決めるとき、私も
選定委員していました！「からはし」ゆえ、「からちゃいろ」。ｳﾌﾌﾌ…です）

●深田久弥『日本百名山』

大洲のご出身だったとは！　中江藤樹のとき、大洲のお話ししていただいたらよかったな、と思いました。大洲の町、とてもフレンドリーな町だと思っています。　山は私も好きで今も登っています。但し、足下の見える山は　NG。なので富士山は登りましたが槍や穂高はハナからトライしません。“百名山のエリア別、高さ別内　訳”…こういう分別したことがなかったので、興味深かったです。　滋賀県はいい山、ほんとにいっぱいあります。まずは滋賀の山、登ってみてください。　それにしても…“お孫さん”がいらっしゃるなんてびっくり。

●芥川龍之介『芋粥』

直接お話がお聞き出来なくて残念でした。でもリポート、拝読いたしました。あ　りがとうございます。芥川は「今昔物語」など古典からひいた話をいくつか書いて　いますが、読んでいくと芥川の思想というか性格…が推し量られます。この「芋粥」　もおっしゃるように、ふと気づくと、私たちの日々の暮らしの中でも経験したり、　思い当たったり…すること、です。だから、不滅の名作なんでしょうが…。湖西の　北

国海道は、芋粥の時代、人もあまり通らぬ物騒な道で、北陸方面へは専ら琵琶湖　を船で行っていたようです。（五位は北国海道を行ったのですね）

●白洲正子『かくれ里』より「木地師の村」

（白洲正子の）旅の動線に沿って話をなさったことが深く印象に残りました。動線　を辿ることで、あれッ？　　と思うことに気づけることが多々あります。**さんのお話からもそれを感じました。白洲さんは何故九居瀬に寄らなかったのか、黄和田　に入っていないのか…。そうなのです。「近江山河抄」や「かくれ里」に近江が書　かれていることで、観光関係者は“白洲正子が愛した近江”などと銘打って観光ラ　インに載せようとされていましたが、白洲さんは文化財に列する自分の興味のある　ものに目を向けられていただけで、近江という地や近江の人を愛していた…とは思　えません。何故なら彼女の文章の中に近江の人や暮らしは書かれていないからです。

日本の文化は消え去るもの（木とか紙とか絹とか…）で出来上がってる…ものが　　多いのですが、それが消えないように守る人がいたからこそ、伝えられてきた、と　　思っています。そこの部分には白洲さんの目は向いていません。2020　　年に世界文化遺産になった木造建築技術…など、まさに“守る人”がいたからこそ伝わってきた ものですし、「林業文化を守る人がいてこそ文化が伝えられている」というお言葉、　共感です。　（長くなってすみません）

●平岩弓枝『日野富子』

　女性だからこそ富子の心の内を多分、正確に受け取られている、と感じました。寂しい富子には、《今、自分が持つものをタテにしてしたたかに生きていくしかなかった》のでしょう…と。夫の愛情こそが彼女の欲しかったものだと思っています。　鈎の陣所の義尚の歌碑に注目されたのもやはり女性の視点だという気がしました。　　ところが、この作品においては男性受けするような描写、筆致が随所にあって、平岩さんて女性作家なのにィ、と思った記憶があります。時代が高度経済成長の男性　中心の時代だったからかもしれませんが…。

●近松門左衛門『冥途の飛脚』

　実は私も講談とか浪曲、落語が好きでしてェ…。人形浄瑠璃も時々見に行ってい　ました。「冥途の飛脚」が近江と関わりがある…と知る人は少ないので、流石に近　江の方！　　ですね。この話は大坂と奈良が中心で、おっしゃるように浄瑠璃としては二人が捕まったところまでですが、実際にあった話なので、その記録から近江と　の関わりが解っています。忠兵衛は処刑され、梅川は追放。梅川は近江草津矢橋の　十王堂まで流れてきて忠兵衛の菩提を弔い八十三歳で亡くなったそうです。梅川の　墓とされる墓が矢橋清浄寺にあって、毎年 11 月に梅川の法要が営まれています。

●城山三郎『一歩の距離』

　ロシアのウクライナ侵攻のさなかのこのお話、実感をもって聞きました。特に、“競争はあってもその中には公正公平がなければならない”ということ、そして、“公正公平な社会と対極にある全体主義、軍国主義の不条理”に触れ、一考したい、と言われたことが耳に残っています。「教育がとても大切」で、それも間違った教育にならないために、先人に学び、歴史に学ぶ…ということが大切だ、という話も説得

力がありました。『一歩の距離』がその切っ掛けになったことが嬉しいです。　やはり先人に学ぶ…姿勢、必要ですね。

●徳永真一郎『燃ゆる甲賀』

一揆が起こったころと今の、地勢や地名が違うことに気づき、それも興味を持つ切っ掛けの一つになった、という話を聞いていて、私と同じだな、と嬉しくなりました。「あれッ？」と思うと、気にかかり、調べてみたり、現地にいって確かめたり…。要領が悪くてハズレも多いのですが、それをすることで、納得に近づけます。**さんも一つ一つを確認し、地元で尋ねて、また確認し…の取材をなさったこと　がよくわかりました。現地を具に見て、空気を感じられたからこそ、180　年も前の農民の心意気に共感されたのだと思いました。

●小金井喜美子『森鴎外の係族』

喜美子の心、おっしゃる通り、歌のままの優しさに充ちています。歌もサることながら、この一文には土山へのおもいも滲んでいます。

現地土山のみならず、東京から島根までの確認旅行、脱帽です。このことについて、**さんのおかげでもう一歩踏み込めました。白仙たちの墓を土山から津和野　に移したことは、当時の津和野の人の中にも土山に置いておくべきだ、と考えてい　る方たちもいらっしゃいました（今、元に還りましたが）。そういう方たちが時を経るうちに少なくなる（語られなくなると、忘れられてくるため）のが残念なこと。“語り伝える”ことの大事さをここでも感じます。ご報告書「森鴎外の祖父白仙、祖母きよ子、母峰子の墓について」拝読いたしました。語られていない津和野では、森家の墓の顛末について、知る人がいなくなってしまっているんですね。

●松尾芭蕉『幻住庵記』

まずは動画にまとめてあったのに、時代！？　　を感じました。ｳﾌﾌﾌ…です。これからはこのように視覚によるアピールが通常になってくるんだ、と改めて思いまし た。ナレーションはご本人だったんですね。文芸のジャンルは広いですが、日本は、 おっしゃっていたように短い言葉で心象風景を表す俳句とか歌があり、「削ぎ落す」 文化があるように思います。歌や俳句だけでなく、暮らしの中の諸々を「削ぎ落す」 のも日本独特かな、と思う時があります。芭蕉の近江好きの因は「文化を共有でき る」人がいたことかな、とおっしゃったこと、きっとその通りだと思います。

●水上　勉『湖の琴』

頂いたリポートの中の地図を見て、主人公さくの歩いた道（当時の人の生活路）に興味津々。今も踏みあとぐらいは残っているのでしょうか…。こういう道、歩く　の好きですから、歩いてみたいと思いました。（文章だけでは心は動きにくいですが、図は心を動かします）若いころ、水上勉を好んでお読みになっていたとのこと、若いとき、読んだ本を今、又読むと感慨が違っていたりすることがありますが、如何でしたか？　　水上は近江、といってもやはり湖北を書いています。湖北は、若狭生まれの彼の感性にピタッとはまるものがあった…のだという気がします。

●水上 勉『湖の琴』

着目点を決めて読書にかかる…方法、そうか、こういう方法もあるのか、と思い ました。そういう読み方をしたことがなかったので、またどれかの本で試してみよ う、と…思います。そして最後におっしゃった「余呉湖で死んだのは許せない」と いう言葉、そうだよねぇ、と思います。自分が大事にしているところがその人の最 後の場所になる…ことへの抵抗感。でも、迎えてあげましょうか…。自分の好きな 場所が安らぎの場になっているのだ、と思えば許せるか…ナ？　　湖北の風土って善いも悪いもひっくるめて、日本の根っこがあるところ、という気がしています。

●東山魁夷『日本の美を求めて』

最初の言葉に惹かれました。「何気ない風景と見逃している中に、滋賀の良さが あるかもしれない！」　　そうなんです。何気ない風景、何気ないおしゃべり、何気ない動き、etc…。穏やかな日常こそが暮らしの原点だと思っています。東山魁夷は、おっしゃるように画家であり名文家。というより詩人だなぁといつも思います。人　は描かれていないのに人の気配が漂っているとおっしゃっていましたが、人との交　わりで、言葉の底に「人」や「暮らし」が住み着いている、のでしょう。それが、　和かな「生」を感じさせる絵になるのだ…と。写真の山村の風景、和みます。

●松尾芭蕉『幻住庵記』

『幻住庵記』の最初に、“雨漏りするし、根笹や蓬が生えているし、壁は崩れてるし、狐､狸は出るし…”みたいなところに、なんで住もうと思ったのかわからなくて幻住庵に出向き、せせらぎ散策道を歩いているうち、「何故？」の疑問が解けた、 という話をされて、ウンウンと心の中で頷いていました。あの辺り、ほんとに清閑　なところです。幻住庵は勿論ですが、誰かが行くというと併せて太子堂にも行って　みて、と勧めています。**さん、行かれたようで嬉しかったです。眺望も写真の　通りですし、お堂に安置の聖徳太子二歳像は、思わず息を呑む像でしたでしょ。

●水上　勉『櫻守』

「ミナカミ」「ミズカミ」…昭和何年かまでの本の奥付は、ミナカミと、近年の本 はミズカミ、とルビが振ってあります。ご本人が、どっちでもいいや、ぐらいに考えていらしたのかもしれないですね。図書館が両方の読み方を入れていない、とい うのは…。でも、ちょっと驚きでした。『櫻守』で書かれていたように日本古来の 桜はヤマザクラ。今はソメイヨシノが一般的なので、桜というとソメイヨシノを頭 に浮かべますが、あの桜では西行の桜好きも芭蕉の句もイメージできないかも…。 ヤマザクラの清楚な美しさが近年、見直されてきているのが嬉しいです。

●芝木好子『群青の湖』

染色作家志村ふくみさんと芝木さんは長い交流があったようです。モデルが志村 ふくみさんというより、「染色家」を主人公にたてて構想を練られた作品だと思い ます。**さんの「あなたの群青色は？」という最初の問いかけに、一瞬緊張？ しました。考えたこと、あったかなぁ、と…。いろんな色を見せていただいて、そし て、“小説の中の群青を探した”とおっしゃったのが（それを作品の中で探そうと 思われたことが）よくわかりました。5 月　4 日が篠田の火祭りです。チロチロとアヤシイ？ 花火です。夜遅いですが、お時間があれば是非。

●白洲正子『かくれ里』～「カミとホトケが融け合う山の世界」近江の文化の基層にあるものは近江の神や仏。それを気づかせられたのが白洲正　　子の本だったとのこと。白洲さんの感性が捕らえた神仏に向き合うと、いろんな「美」が見えてきます。おっしゃられるように、便利の陰で神仏の存在、自然の中　のニンゲンということを忘れがちですが、近江にはまだそこに気づかせてくれる風　景があるように思います。そういう風景を守っている人達がいるからなのですが、時代はなかなか厳しいです。近江の美しさは暮らしの文化が伝えられていることに　もあると思っているので、そういうものをきちんと伝えていきたいですね。

●徳永真一郎『燃ゆる甲賀』

甲賀一揆の起こった地の今の事情（現在住民 35～40 万人。当時 5 万人ぐらいか？など）を教えていただいたのが参考になりました。地域の規模は、今も昔も暮らし　を営む上での大きな要素の一つだと思いますから。ご自宅がお近いということもあ　って、とはおっしゃっていましたが、大変よく調べていらっしゃる、と感じました。 調べ始めると次々疑問点が生じてくるものですが、一つ一つ疑問を潰すようにして、三上騒動に向き合われたな、という感じがしました。野洲郡の庄屋が平兵衛だ　け？という疑問、想像はできますが、納得いく答が私も見つかっていません。

以上